キズナエピソード

朝永 花織　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//都立有羽・外

花織はいつも、誰かから厄介事を頼まれている。

その展開に慣れきってしまった俺は、

放課後になるといつも花織を探していた。

今日は美化委員会の面倒を引き受けたのか、

外の花壇で土いじりをしていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［とびお］

「よう、おつかれー」

［花織］

「とびおくん!?　どうしてここに……？」

［とびお］

「花織のことだから、

また厄介事を頼まれているんだろうなと思ってさ。

……あれ？　いろは？」

［いろは］

「おや、とびおじゃーん。どしたの？」

［とびお］

「いや、お前こそどうしてここに？

美化委員じゃないだろ」

［いろは］

「あたしはカオリンのお手伝いだよー。

お花の世話するのって、なんか楽しいよね」

［花織］

「そっか。いろはととびおくんって同じクラスだったね。

いろはは、こうやってときどき手伝ってくれるんだよ」

［とびお］

「なるほど。ちょうどいい。

俺も手伝いに来たわけだが、三人ならすぐに終わるだろ。

ぱっぱと済ませて帰ろうぜ」

［とびお］

そして、俺は2人と一緒に花壇の整備に精を出した。

その甲斐あって、まだ日が明るいうちに

帰路につく事ができたのだった。

//暗転

//カフェ・店内

［とびお］

そして今、俺達はこの前行ったカフェで一息ついていた。

なぜここにいるのか。理由は単純明快。

人の金で飲むカフェモカは美味しいからだ。

［いろは］

「カオリン～。

公式ちゃんと当てはめてるのに、

割っても割っても答えが出てこないよー」

［花織］

「いろは、そこはただ単に数字違いの計算ミスだよ。

答えが無理数になったら、計算ミスを疑おう？」

［とびお］

小テストの勉強教えてほしい。

帰り道でいろはがそうお願いしてきたので

カフェのおごりで手をうったのである。

［とびお］

「いろは、そこはラ変だから、『ありたり』だ。

ラ行変格活用、授業で習ったろ？」

［いろは］

「ラオウ原発渇望……？」

［とびお］

「怖すぎるわ！」

［いろは］

「うむむむ……。

ねぇねぇ、そう言えばさカオリン。

ちょっと教えてほしいんだけど」

［花織］

「なに？　今度はどこがわかんない？」

［いろは］

「かおりんととびおって付き合ってるの？」

［花織］

「わきゃっ！」

［とびお］

花織がカップを盛大に取りこぼした。

慌てて元に戻すものの、中身が机の上に広がってしまう。

［とびお］

「おいおい、何してんだよ。

待ってろ、今おしぼりもらってくるから」

［花織］

「ごめん、ありがとう。

ちょ、ちょっといろは。何変なこと言ってるの！

別にウチととびおくんは、そういうのじゃないから！」

［花織］

「とびおくんは面倒見がいいだけだよ。

お互いのことだってそんなに知らないし……。

向こうはウチのことなんて、気にしてないの！」

［いろは］

「ふーん。そっか。

まったくとびおは勿体無いことしてるね。

せっかくカオリンみたいな美少女に好かれてるのに」

［花織］

「なんでウチの好意が決定事項になってんの！」

［いろは］

「えー、違うの？

だってさっきの言葉を聞く限りだとー……」

［とびお］

「おしぼりもらってきたぞ。

……どうした花織？　顔が真っ赤だぞ？」

［花織］

「なんでもないっ！」

［とびお］

結局その後すぐ、俺達はカフェを後にした。

いろははもう少し教えて欲しいとぐずっていたが、

花織はなぜかむくれたまま、応じようとはしなかった。

//暗転

//花織の部屋

［花織］

（はぁ。まったくいろはは……

ウチととびおくんが付き合ってる？

そんなわけないじゃない！　そんなわけ……）

［花織］

（でも……周りからは、

そういう風に見えてたんだろうな。

なんか嬉しい……）

［花織］

（って、嬉しい？　なんで？

あれ？　ウチはとびおくんのことを――）

［花織］

「好き、なの？」

［花織］

（っ！　……なにこれ！

言葉に出しただけで、体が熱い！

めっちゃ恥ずかしい！）

［花織］

（そうか。そうだよね……。

ウチ、とびおくんのことが好きなんだ――！）

//【R18版の場合、ここに挿入】

//ADV形式終了

//3話END